

松村通信第 171 号

9月27日
松村勝弘

現象学（補遺）

近況 昨年11月25日に脳梗塞を発症し退院後6カ月も身動きがとれない日々が続いている。発症以来、無理せずのんびりと続けたいと思っている。最近は訪問リハビリの日が週3日だ。この日はいつもながら、張り切る。余命いくばくもないと分かっている、張り合いは必要だ。デイケアの日が週2日あるから、この日も張り切っている。それに阪神ファンの私にとって嬉しいことに阪神2連覇の楽しみがある。9月に入って不調が続く、やきもきしたが。

デイケア日は朝10時前に迎えの車が来て、夕方4時過ぎに帰るまで、リハビリ、体操、入浴そして昼食、おあつ、と続く。

それにしても、老老介護の毎日である。女房に頼らないと何もできない。女房にはいろいろ言われっぱなしだが、したがわざるを得ない。家庭平和が一番である。

それにしても、思うことは、これではただ生きているだけではないのか、と。

植物人間 今回は、村上靖彦『ケアとは何か』（中公新書、2021年）を読んだときに紹介されていて面白そうだと思って読んだ本を紹介しよう。この本の出版社による紹介によると、「語り手の経験に敬意を持ち、語りを可能な限り丁寧に扱う。語りのなかに隠れているその人の経験と思考の襞を精密に解きほぐしていく

——大阪大学と東京大学で15年近くにわたって著者が行ってきた授業を踏まえた入門書」(<https://www.nakanishiya.co.jp/book/b10154374.html>)となっている。これまでに、村上氏の本は本通信第148号でも同氏による『客観性の落とし穴』を紹介したが、今回のこの本は難しい。また、入院中に読んだ、本通信第169号で紹介した村上靖彦『ケアとは何か 看護・福祉

で大事なこと』（中公新書、2021年）で関心を持ったことがきっかけだ。だが、『現象学的質的研究入門』は難しい。章別編成をみておこう。

序章 現象学的な質的研究とそこから帰結する世界

第1章 語りを読み解く技術

補章1 自分が伸びる喜びを子どもが感じる

第2章 語りを聴く

第3章 語りを読む

第4章 現象学の倫理

補章2 事例分析と手順に解説

第5章 この世界と人間の経験はどのような姿をしているのか？

結 論 多元的宇宙

このように、目次を見ても、目もくらむほど大きな問題提起もされている。でも、微力ながら何ごとか言ってみよう。今回は前号の補遺版のようなものだ

出版社サイトの著者紹介によると、著者は、「1970年、東京都生まれ。基礎精神病理学・精神分析学博士（パリ第7大学）。現在、大阪大学人間科学研究科教授・感染症総合教育研究拠点 CiDER 兼任教員。専門は哲学と現象学的な質的研究。／著書に『客観性の落とし穴』（筑摩書房）、『ケアとは何か——看護・福祉で大事なこと』（中央公論社）、『「ヤングケアラー」とは誰か——家族を“気づかう”子どもたちの孤立』（朝日新聞出版）、『鍵をあけはなつ——介護・福祉における自由の実験』（中央法規出版）、『傷つきやすさと傷つけやすさ——ケアと生きるスペースをめぐるある男性研究者が考えたこと』（KADOKAWA）など。共著に『アイヌがまなざす——痛みの声を聴くとき』（岩波書店）などがある。」とされていて、哲学と現象学的な質的研究が専門だという。

客観性・数値化への疑問 若いころからマルクス経済学に親しみ、その後これに疑問をもったが、ぬけきっていただろうか。現象学を学び初めて、つくづくそう思う。

近代西欧に毒され、客観至上主義、数値化信奉を続けていったよいのだろうか。若い頃にすべてを大状況から説き起こすことに疑問を感じ、もっと身近な小状況から考えよ、といていたのを思い出す。だから現象学に共感する。村上氏はいう。「神の権威が失われ、自然は神の摂理ではなく、自律的な法則を持ち、人間は数式と数値によって自然を理解しコントロールできるとみなされるようになる。現代の意味での客観性という用語法が生まれたのが 1820 年代、普及したのが 1850 年代であると言われる」(7 頁、以下すべて頁数のみを示すのは村上靖彦『現象学的質的研究入門——一人ひとりに固有の経験と向き合うために』。ナカニシヤ出版、2025 年]の頁数である)。西欧では神を否定しても一神教的伝統はそのまま残った。マルクス経済学も法則性を重視し、そして一元的である。だから村上氏は「私自身は西欧の学問で生じたこの大きな地すべりは、キリスト教が失墜するなかで、真理を保証する審級が、神から数字へと移行した帰結だと理解している。数値一元論もまた、一神教的な価値観である。ともあれ真理が属する場所が、客観性と数値へと一元化されたのが 19 世紀以降の西欧型社会だ。」(8 頁)

マルクス主義も唯物論で、客観的事実を重視する。近代西欧の流れだ。

語りと一貫性 しかし現実社会は一元論では理解できない。法則どおりに世の中が変化するわけではない。ここに現象学がでてくる。しかし現実を理解し説明するためにはバラバラな現象に一貫性、意味をもたらす必要がある。それは何か。「不条理で無意味な出来事も少なくないなかで、それでも意味を見出そうとするとする営み、それが語りだ。／語りは、因果関係では、捉えられない複雑な事象につながりと意味を与える。」(49 頁)そして言われる。「現象学的な質的研究は、客観化が持つ弱点を補う役割を持つ。決して客観科学・数値化を否定するわけではない。俯瞰的な視点を取ったときに削ぎ落とされる

側面について、別の視点から補うのだ。」(9 頁)

現象学と語り 「現象学は、客観性とは違う道をたどるからといって『主観的』であるわけではない。」(2 頁)主観ではなく、間主観性なのだ。すなわち、「事物の客観的な認識とは異なる次元で推移する、人間経験の機微を明らかにしたのだ。」(3 頁)という。「一つの歴史を刻み込むかを示す普遍的構造である。その深さと広さを理解することは、現代に生きる私たちにも——分裂し、孤立化するとき——根源的な連帯と共存の可能性を示唆するのである。」²⁾

この場合の、語りとはどんなものだろうか。現象・現実根ざしているからリアリティがある。ストーリー性がある。ストーリーがないと、語れないからだろうか。

「偶然の出来事と創造的な行為からなる私たちの経験は、語りによって捉えることができる。人間の経験が持つリアリティと創造性をクリエイティブを出発点にして考えることを現象学的な質的研究は試みてきた。」(146 頁)「出来事は語られて文章となる。言葉で説明されていないあいまいな状況は、語りだすときになにがしかの秩序を獲得する。」(146 頁)インタビューを受けて語りだすとき、人に伝えるために、自身振り返る。だからわかるのだろう。

- 1) ① <https://www.youtube.com/watch?v=BhvfOTz4tlg>

YouTube・Sonson's Academy そんそんずアカデミー

- ② <https://www.youtube.com/watch?v=pERQyOkfJ78>

2) hiro_k295「フッサール現象学における志向性と

間主観性」2025 年 10 月 16 日

https://note.com/hiro_k295/n/ne75f5a519f9a

HP, FBを見て下さい。又何でも意見を。

皆さんのご意見を歓迎します。HP
(<http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/>) もご覧下さい。
フェイスブックもやってます。また、メールで意見
交換しましょう。メールをよこして下さい
(matumura@mba.ritsumei.ac.jp)。